

律令制大臣からみた光仁・桓武期

土 居 嗣 和

はじめに

光仁・桓武期は、一般には律令制再建の時代であると評価されている。とくに称徳期が道鏡を起用するなかで政治的混迷をもたらしたのに対し、光仁期にはそうした混迷を脱却する政策が展開されたことは、当該期の特徴であるといえよう。いっぽう、内臣という官職に光仁期において藤原良繼・魚名が任じられている【表一】ことをもって、藤原氏内部での主導権争いも生じていたとも捉えられている^①。

ただしこれらの見解については問題点も存する。まず称徳期との対比については、一般に光仁・桓武期が平安時代の初期として位置づけられていることもあって、奈良時代との断絶に主眼を置いて論じられることが多い。しかし政治体制などが突然に変わることを想定することは難しく、政治的混迷からの脱却をもとめるのであれば、それだけ前代の政治体制を念頭に置かざるを得ないだろう。そしてそれは、たんなる断絶とは評価できないように思われる。この点で、奈良時代の政治制度、とくに律令制大臣のあり方などとの関わりを踏まえる必要があるであろう。

また内臣を通じて藤原氏内での権力闘争のみを論じる点についても疑義が存する。内臣については、たしかに内臣

表1 光仁・桓武期の内臣・律令制大臣・大納言

	天皇		内臣		左大臣		右大臣					大納言													
	光仁	桓武	藤原良繼	藤原魚名	藤原永手	藤原魚名	大中臣清麻呂	藤原田麻呂	藤原足公	藤原繼繩	神主	大中臣清麻呂	藤原魚名	文室大市	石上宅嗣	藤原田麻呂	藤原足公	藤原繼繩	藤原小黒麻呂	紀船守	神主	紀古佐美	宅志濃王	藤原雄友	藤原内麻呂
宝亀元							※					※													
宝亀2												※													
宝亀3																									
宝亀4																									
宝亀5																									
宝亀6																									
宝亀7																									
宝亀8				☆																					
宝亀9													☆												
宝亀10																									
宝亀11																									
天応元				★		★																			
延暦元				★				◇																	
延暦2																◇									
延暦3																									
延暦4																									
延暦5																									
延暦6																									
延暦7																									
延暦8																									
延暦9																									
延暦10																									
延暦11																									
延暦12																									
延暦13																									
延暦14																									
延暦15																									
延暦16																									
延暦17																									
延暦18																					▽				
延暦19																									
延暦20																									
延暦21																									
延暦22																									
延暦23																									
延暦24																									
大同元																									

・同一符号は、任官が継続して行われていることを示す。

・内臣のうち、藤原良繼については宝亀8年正月より内大臣、藤原魚名については宝亀9年3月より忠臣、宝亀10年正月より内大臣となっている。

就任者が藤原氏に限られていることから、その性格として藤原氏内での立場に注目することは妥当ではある。いっぽう、八世紀の内臣は「王権からの個人的信任によつて、大臣よりも低い位階を帯しながらも専制的権力を發揮するために任命された」もの⁽²⁾であつて、王権が内臣をどのように位置づけたかという視点こそ本来求められるべきであろう。ことに光仁・桓武期が皇権の伸長をみせる時期である⁽³⁾ことを踏まえれば、なぜ光仁天皇は律令制大臣とは別に内臣を設置したのか、ということをより検討すべきように思われる。この点、藤原魚名左降事件の検討にあたつて、天皇の權威拡大をはかる光仁・桓武天皇と、官僚貴族を構成する藤原氏との対立關係に注目すべきであるとした亀田隆之氏の指摘⁽⁴⁾は首肯されよう。

以上のような関心にもとづき、本稿は次のような構成をとる。まず光仁期について、天皇即位の事情にふれつつ、律令制大臣と内臣が並置された事情を考察する。そして、桓武期において律令制大臣のみが置かれるようになったことについて、光仁期との比較や桓武天皇の行動との関わりから考察する。以上を通じて、光仁・桓武期の特徴を、当該期の律令制大臣のあり方に注目しながら論じることとする。

一、光仁期における律令制大臣

(一) 光仁天皇の即位事情

『統日本紀』宝龜元年（七七〇）八月癸巳（四）条は、称徳天皇の崩御から光仁天皇の即位までの事情を次のように記している（以下、『統日本紀』の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）による）。

天皇崩^三于西宮寢殿^一。春秋五十三。左大臣從一位藤原朝臣永手・右大臣正二位吉備朝臣真吉備・參議兵部卿從

三位藤原朝臣宿奈麻呂・參議民部卿從三位藤原朝臣繩麻呂・參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣・近衛大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等、定_レ策禁中_一、立_レ諱為_二皇太子_一。左大臣從一位藤原朝臣永手受_二遺宣_一曰、今_レ詔_久、事卒然_尔有依_天、諸臣等議_天、白壁王_波諸王_能中_仁年齒_毛長_利。又先帝_能功_毛在故_仁、太子_止定_テ、奏_流麻_仁麻_尔宣_給勅_此久_宣。

この記事によれば、藤原永手、吉備真備、藤原繩麻呂、石上宅嗣が禁中において次期天皇を議するなかで、称徳の遺宣を参照しながら白壁王、すなわち光仁天皇を選出したことになる。

いっぽう多くの先行研究で触れられているように、この光仁天皇擁立に際しては、『日本紀略』宝龜元年（七七〇）八月四日条に引かれる「百川伝」に次のような異伝が存在する（本文は新訂増補国史大系による）。

皇帝遂八月四日崩。天皇平生未_レ立_二皇太子_一。至_レ此、右大臣真備等論曰、御史大夫從二位文室淨三真人、是長親王之子也。立_二皇太子_一。百川与_二左大臣・内大臣_一論云、淨三真人有_二子十三人_一、如_二後世_一何。真備等都不_レ聽_レ之。冊_二淨三真人_一為_二皇太子_一。淨三確辞。仍更冊_二其弟參議從三位文室大市真人_一為_二皇太子_一。亦所_レ辞_レ之。百川与_二永手・良繼_一定_レ策、偽作_二宣命語_一。宣命使立_レ庭令_二宣制_一。右大臣真備卷_レ舌無_二如何_一。百川即命_二諸仗_一冊_二白壁王_一為_二皇太子_一。

これによれば、吉備真備は文室淨三を推したものの、藤原百川、左大臣＝藤原永手、内大臣＝藤原良繼がこれを拒絶した。そして百川らが偽詔を作つて白壁王を擁立したとしている。彼らが白壁王＝光仁を擁立した事情については先行研究に委ねることとし、ここでは『日本紀略』の記事に即して、百川らが擁立することによって光仁天皇の即位が可能となったということに注目したい。

光仁天皇は政治を進めるにあたって、称徳天皇のもとでも律令制大臣となっていた藤原永手、吉備真備をそれぞれ左大臣、右大臣として引き続き起用した。このうち吉備真備については、宝龜元年十月丙申（八）に老齢のために致仕を申請している。しかし光仁天皇は、兼官であった中衛大將を解くのみで、右大臣については引き続きつとめるよう詔している。この後も真備は右大臣を続けたようであり、『公卿補任』宝龜二年の吉備真備尻付には「三月日致仕」とある。大中臣清麻呂が右大臣に就いたのは宝龜二年三月庚午（十三）である（『続日本紀』）ため、実際には清麻呂の就任まで右大臣のままであったと考えられる。これによれば、光仁天皇は称徳期において大臣を務めていた吉備真備の経験を利用したと推測できよう。

いっぽう左大臣永手については、宝龜二年二月癸卯（十六）に急病を発している。このため光仁天皇は、当時大納言であった大中臣清麻呂に詔して、「大臣の事を摂し行」わせることとした。永手はそのまま同月二十二日に没し、右の通り、三月に清麻呂が右大臣に就任したのである。

ただこの清麻呂の右大臣就任に加えて、さきに即位に際して登場した藤原良継が内臣となっている。律令制大臣がいるにも関わらず、なぜ内臣が置かれたのかということについて、節を改めて論じたい。

（二）律令制大臣と内臣の併置

①右大臣清麻呂と内臣良継

内臣については山本信吉氏をはじめとして多くの研究が蓄積されており、良継の内臣就任については、山本氏が次

のように言及している。すなわち良継が藤原氏の主導権を握りつつ、同時に大中臣清麻呂を抑えて太政官の中心となるために、内臣を持ち出してこれに就任したとしている⁽⁵⁾。この後につづく研究も、基本的には山本氏のような清麻呂と良継の対立構図を継承して議論が展開されている。しかしはじめに述べたように、内臣に就くのは何より王権側の承認があつてこそであり、そうした視点を踏まえて初めて対立如何も論じられよう。

ここでは王権の意図を探る手掛かりとして、王権が律令制大臣をどうとらえたのかということに注目したい。この点はさきに別稿において宣命を素材として検討し、①律令制大臣は、宣命などにおいては「位」と表現されており、それは律令制以前から大臣が一つの地位として認識されていたことを示している、②ただし称徳期には、道鏡に特に律令制大臣と同等の「位」を与える一方で、藤原永手は太政官の政務に特化した大臣とすべく、大臣という存在を「官」とみなしてこれを与えた、という結論を得た⁽⁶⁾。つまり律令制大臣について、天皇の近臣であるという伝統的なあり方Ⅱ「位」と、律令制にもとづく執政者としてのあり方Ⅱ「官」という二つの側面が、称徳期に出現したということである。もちろん右大臣を「官」と表記した天平神護二年正月八日宣命ののち、同年十月には再び左大臣・右大臣ともに「位」と表記する宣命が出ているので、単純に律令制大臣の二面性が光仁期に継承されたと論じることが難しい。しかし光仁期において律令制再建に乗り出す場合、このように大臣の多様な側面に注目することが、王権にとつては一つの方法となりえたのではないだろうか。

以上のように考えたとき、薨伝において「歴_レ事数朝」、為_二国旧老_一。朝儀国典、多_レ所_二諳練_一。在_レ位視_レ事、雖_二年老_一而精勤匪_レ怠」（『続日本紀』延暦七年七月癸酉（二十八））と称せられた大中臣清麻呂には太政官の政務にあたらせ（Ⅱ律令制大臣の「官」的側面）、自らの即位に貢献した藤原良継には側近（Ⅱ律令制大臣の「位」的側面）として政務にあたらせることとした⁽⁷⁾というのが、光仁期における右大臣・内臣並置の背景であつたと推測できる⁽⁸⁾。

内臣が律令制大臣に準じた身分であつたことは、良継の内臣就任に際して、宝龜二年三月壬申（十五日）に「勅、

内臣職掌・官位・禄賜・職分雜物者、宜^三皆同^二大納言^一。但食封者賜^二千戸^一とされたことから知られる。基本的に内臣の職掌などは大納言と同様としているが、注目すべきは食封を「千戸」としていることである。本来、大納言に対しての職封は八〇〇戸、左右大臣は二〇〇〇戸である（養老禄令10食封条）から、内臣は大納言より優越した地位であるといえる⁽⁹⁾。筆者もかつて大臣の地位的特質について検討を加え、日本の律令制においては大臣の地位を職封などの「職分」という枠組みを通じて保証したことを明らかにした⁽¹⁰⁾。この点を考慮しても、良継の就任した内臣が、より律令制大臣に近いことが首肯できるだろう。そしてそれは宝龜八年（七七七）正月丙辰（三）に内臣を内大臣と改称していることから裏付けられよう。

ただこのように見てみると、大中臣清麻呂を左大臣とし、藤原良継を右大臣とするような方法をとることもできなかったのではないかということも考えられる。倉本一宏氏は「位階の低い良継を、ほかの二位官人に超越させることができなかった」ことから、良継を右大臣としなかったとみている⁽¹¹⁾。ただここでは大中臣清麻呂をなぜ左大臣としなかったのかということをも併せて考える必要がある。この点、林陸朗氏が述べた、大中臣という家柄を考慮して清麻呂が左大臣就任を憚ったとする見解が参考になる⁽¹²⁾。これらの事情が重なったことに加えて、宝龜五年（七七四）十二月乙酉（二十）には清麻呂が致仕を乞うたため、清麻呂を新たに左大臣に任じることが困難になったことから、右大臣・内臣という形が長く維持されることとなったと考えたい。

先行研究では右大臣清麻呂と内臣良継とが併存していたことについて、両者の牽制や対立といった政争を背景に見出すものが多くみられる。たとえば田中正日子氏は、良継が「時の右大臣大中臣清麻呂をしのぐ政治の担当者となった」とし⁽¹³⁾、中川收氏も内臣であることや光仁擁立の実績などによつて、良継は大中臣清麻呂に実質的な右大臣の職掌を保持させなかったとしている⁽¹⁴⁾。権力の優劣についてはどのような指標に基づいて論じるかによつて異なるため明言は難しいが、ここでは田中氏、二宮正彦氏などと同様に、当該時期の官符における宣者として彼らがどのよ

うに表れているのかということからこれを検討してみたい。『類聚三代格』、九条家本延喜式紙背文書（『大日本古文書』編年所収）などから知られる宣旨を一覧にしたのが【表二—一】である。

この表では全二十五例中、右大臣十二例、内臣十二例、判別保留一例となっている。文書内容の個別検討については省略に従うが、事書から概観する限りは、両者の宣する内容に明確な差異は認められない。二宮氏の述べるように、当時の太政官では清麻呂と良継の権力が並立していたとみるべきであろう^{〔15〕}。したがって良継の優位は認められず、林氏の述べるように、表向きには良継は清麻呂を超えられなかったということになる^{〔16〕}。また文書以外にも、宝龜三年二月戊辰（十七）には、光仁天皇が清麻呂第へ行幸しており、岩本次郎氏が述べるように、天皇と清麻呂との間には信頼や親密感のようなものを認めることができるのである^{〔17〕}。以上のことを踏まえる限りでは、極端に清麻呂が劣勢に立たされていたとすることはできないように思われる。

倉本氏は内臣を「官僚制の不熟な奈良時代のみ見られた特殊な例外」ととらえている^{〔18〕}が、ここである「特殊」な事情とは、称徳期の混乱を収束させ、律令制に即した王権という方を整備しようとしたことであろう。そしてそれは、たんに「官僚制の不熟」なことのみによるものではないと思われる。長山泰孝氏は、光仁・桓武父子の負った課題として、政治主体の建て直しによって律令国家の政治的頹廃から脱却するということがあったとしている^{〔19〕}。これを踏まえれば、王権の主体性ばかりが強調された称徳期から転換し、王権が主体性をもちつつも、それを律令制によって制御するというあり方が、光仁・桓武に求められたということになる。したがって律令制へと軌道修正をさせるために、律令制にもとづく政治を助けつつも、あくまで臨時的な官職である内臣を光仁天皇は設けたと考えられるのである。そしてそのいっぽうで、律令制に即するという点を強調した存在として、右大臣の大中臣清麻呂を置いたのである。ただ大中臣清麻呂がすでに就任時点で六十九歳と老齢であって、養老選叙令21では「凡官人七十以上、聴致仕」と、翌年には彼は致仕が認められる年齢となっていた。こうしたなかで、老齢の清麻呂への負荷を軽減

表2-1 右大臣大中臣清麻呂―内臣藤原良繼の官符

年月日	文書名（（ ）は冒頭や内容を記載）	宣者	「奉勅」	典拠
宝亀 2.8.13	応禁断月六斎日并寺辺二里内殺生事	内大臣	○	三代格 595
宝亀 3.5.20	(広瀬神社壱前)	右大臣	×	* 1
宝亀 3.5.22	応專当国御馬官人事	内大臣	○	三代格 574 ~ 575
宝亀 3.10.14	聴鑿田事	右大臣	○	三代格 441
宝亀 3.12.19	(応奉幣神社)	右大臣	○	* 2
宝亀 4.2.8	(安倍猿鳥姓賜与)	内臣	○	大日古 21-272 ~ 273
宝亀 4.2.11	取献四天王寺田応班給位田併百姓口分田事	右大臣	○	大日古 21-273
宝亀 4.2.14	応解却武藏国人間郡司等事	右大臣	○	大日古 21-273 ~ 274
宝亀 4.2.14	取献四天王寺田応班給位田併百姓口分田事	右大臣	○	大日古 21-274 ~ 275
宝亀 4.2.16	寺神封戸田租用正税応補充事	内臣	○	大日古 21-275 ~ 276
宝亀 4.2.16	(給禄三人)	内臣	×	大日古 21-276 ~ 277
宝亀 4.2.24	(皇太子封戸)	右大臣	○	大日古 21-277 ~ 278
宝亀 4.2.25	(合交易乾草)	内臣	×	大日古 21-278 ~ 279
宝亀 4.2.30	応修理佐保川堤六処	内臣	×	大日古 21-279 ~ 280
宝亀 4.3.5	応給宮人職事并散事五位已上季禄事	内臣	○	大日古 21-280 ~ 281
宝亀 4?-?-	(合稻拾玖万束)	内臣	○	大日古 21-282 ~ 283
宝亀 4.8.27	(經典奉請)	内臣	○	大日古 22-181
宝亀 4.711.23	(雑米未進事)	右大臣	○	貞観交 34
宝亀 4.12.4	神琴生二人事	右大臣	○	三代格 176 ~ 177
宝亀 5.3.3	応奉造四天王寺埴像四軀事	内大臣	○	三代格 45
宝亀 5.5.17	応大宰府放還流米新羅人事	内大臣	○	三代格 569
宝亀 5.7.23	(伊勢大神宮の処分)	右大臣	○	神宮雑 165 ~ 166
宝亀 5.8.27	応取神郡百姓逃亡口分田地子事	内[右]大臣	○	三代格 16 ~ 17
宝亀 6.6.13	応科上祓祈年月次新嘗祭不参五畿内近江等国諸社祝事	右大臣	○	三代格 35
宝亀 8.3.28	(川原寺田地施入)	右大臣	○	大日古 6-597 ~ 598

【典拠略号】

三代格…『類聚三代格』（頁数は新訂増補国史大系本）、大日古…『大日本古文書』編年、神宮雑…神宮雑例集（群書類従所収）、貞観交…『貞観交替式』（頁数は新訂増補国史大系本）。

- * 1 弥永貞三「大伴家持の自署ある文書」『日本歴史』42、1951年11月。
- * 2 田中卓「新たに世に出た『宝亀三年太政官符』」『日本上古史研究』1・12、1957年12月。

- ・本表作成にあたっては、二宮正彦「内臣・内大臣考 ―藤原朝臣魚名を主題として―」『続日本紀研究』9・1、1962年1月、早川庄八「上卿制と議政官組織」『日本古代官僚制の研究』岩波書店、1986年を参照した。なお二宮氏の整理では日付記載の異なる同一文書についても取り上げていたが、ここでは一方のみを取り上げることとした。
- ・なお表から明らかなように、『類聚三代格』本文は官符所収にあたって官符中の「内臣」をすべて「内大臣」と書き改めていることが知られる。

しつつも、律令制に即した王権を整備するという「特殊」な事情に対応するために、自らの擁立に貢献した良継を起用したのではないだろうか。右大臣、内臣ともに奉勅宣が目立つことも、光仁天皇が主体となった政策展開を裏付けているように思われる。

律令制に即した王権という点では、宝龜八年（七七八）五月己巳（十九）に「自_二宝字八年乱_一以来、太政官印收_二於内裏_一、毎日請進。至_レ是、復置_二太政官_一」という処置が行われていることにも注目できる。これによれば、宝字八年乱、すなわち恵美押勝の乱以来、内裏に納められていた太政官印が、太政官へと戻されたのである。ここからは、太政官という律令制機構を王権が制御するというあり方から、太政官が自律的に機能するあり方へと変更していくことがうかがわれる。そしてそのような太政官を取り仕切る存在が、政務に熟達した右大臣清麻呂と、光仁擁立に貢献したことを通じて清麻呂の補助にあたることとなった良継だったのである²⁰。換言すれば、右大臣の大中臣清麻呂には律令制に基づくという「官」としての役割が期待され、内臣の良継には天皇との近きにもとづく「位」としての存在を根拠とした活躍が求められたのである。そのゆえに良継は大臣に準じる権限を与えられ、宝龜八年正月に「内大臣」とその称が改められ、さらに『続日本紀』宝龜八年九月丙寅（十八）条の彼の薨伝に「專_レ政得_レ志、升降自由」とあるように、人事権を自由に操っていたのであろう。この点については律令制に基づく王権からみれば、良継のこうした行動は抑制されるべきではある。しかし光仁天皇は、良継が自らの擁立にもかかわった人物であるゆえに、彼を制御することまではできなかったものと考えられる。

② 右大臣清麻呂と内臣魚名

光仁天皇は律令制にもとづく王権というあり方の構築を図ったのであるが、それを支えていた内臣の良継は宝龜八

年(七七七) 九月に病没した。このとき内臣を廃するという方法をとることもできたかもしれないが、実際には宝龜九年三月乙酉(三)に内臣として藤原魚名が任じられている。この内臣設置の継続理由としては、やはり良繼同様に、天皇との近さに基づいて大中臣清麻呂の補佐をつとめさせようとしたことが考えられる。

先行研究では、魚名についても右大臣清麻呂との権力対立が論じられてきた。倉本氏は、「魚名にどうしても政治の実権を握らせたかった王権は、魚名を律令制外の変則的・ミウチ的官職である内臣」に就けることで、「清麻呂を牽制しながら、魚名に専制を振るわせたのであろう」⁽²⁾とみている。権力対立を明確に裏付ける史料が少ないことから、ただちにその当否を論じることとはできないが、ひとまずここでは良繼と同様に文書をつうじて検討することとしたい。

魚名が内臣に就任して以降、右大臣・内臣(内大臣⁽²⁾)のみえる太政官符は【表二—二】の通りである。これをみれば天応元年に右大臣の名でも官符が出されており、清麻呂がまだこの段階まで官符の発給を続けていたことが知られる。文書の発給が一例のみにとどまっていることについては、権力の問題に限定せずに、林氏のいうように、清麻呂が老齢であるゆえであるとするのが穏当であろう⁽²⁾⁽³⁾。

なお文書以外には、大中臣清麻呂は宝龜十年五月庚申(二十)に唐客を自邸において饗応している。大臣がこのように外交にかかわることについては、長屋王が詩宴を開いたこと(『懷風藻』)や、藤原仲麻呂が渤海使を自邸に招き入れていること(『続日本紀』天平宝字三年正月庚午(二十七)にも通ずる「大臣外交」⁽²⁾)につらなるものと考えることができる。これをも考慮すれば、一概に王権が清麻呂の権力牽制を図ったとは断言できないように思われる。以上のように考えた場合、清麻呂牽制という目的よりも、光仁天皇はなぜ魚名という人物を内臣としたのかということを検討することこそ求められよう。もちろん良繼が式家であり、魚名が北家であるということを踏まえ、藤原氏内部での主導権争いが内臣という地位をめぐって展開したという点⁽²⁾⁽⁵⁾も重要ではある。しかしそうした事情の如何

表2-2 右大臣大中臣清麻呂―内臣藤原魚名の官符

年月日	文書名（（ ）は冒頭や内容を記載）	宣者	「奉勅」	典拠
宝亀 10.8.25	応責国郡司受使無返抄事	内大臣	○	貞観交 39
宝亀 10.10.16	応加禁断事	内大臣	○	三代格 613
宝亀 10.11.29	禁断隠蔽事	内大臣	○	三代格 404
宝亀 11.6.16	（封一百戸施秋篠寺）	内大臣	○	三代格 347
宝亀 11.10.26	応京畿内七道諸国括部内浮宕百姓事	内大臣	○	三代格 384
宝亀 11.12.4	応禁制壊墳墓事	内大臣	○	三代格 591-592
宝亀 11.12.10	（東大寺封戸用途）	内大臣	○	三代格 346
天応 1.3.8	請加射田事・請置学校料田事	右大臣	○	三代格 466
天応 1.4.10	停鉄甲造革田事	内大臣	○	三代格 561

※典拠略号などについては、表2-1を参照のこと。

を問わず、なぜ光仁天皇が魚名を任じたのかということをここでは検討したい。これを考えるにあたっては、『続日本紀』延暦二年七月庚子（二十五）条にみえる魚名の薨伝に「八年、授^三從二位」。年已長老、次当^三輔政」、^三「^三内臣」とあることに注目したい。すなわち、良継と同様に律令制に基づく王権というものを構築するために魚名を内臣としたということが、「輔政に当たる」という語から推察されるのである。なお光仁天皇が魚名を選んだ理由は、山本氏のいうように、「藤原氏の長老」という立場であったことに求められるであろう⁽²⁶⁾。

またなぜ良継の末期のように「内大臣」として初めから任じるのではなく、「内臣」としたのかということについては、あくまで推測の域を出ないが、光仁天皇ができるかぎり「内臣」の権限を制御しようとしたためであるように思われる。この点は、魚名を宝亀九年三月己酉（三）に「内臣」に任じながらも、同月丙子（三十）には改めて「忠臣」と称していることにも関連しているだろう。つまり、腹心であることを根拠に政治を行うのではなく、あくまで天皇の命に即して忠実に政務を行うべきであるということを、光仁天皇は「忠臣」という語に含めたのではないだろうか⁽²⁷⁾。

光仁天皇と魚名の関係については、『続日本紀』宝亀八年三月戊辰（十六）に天皇が魚名の曹司に行幸していることに注目できる。ここで想起したいのは、宝亀三年二月戊辰（十七）、同九年四月甲午（十八）に大中臣清麻呂の

第にも光仁天皇が行幸していることである²⁸。すなわち藤原氏に限らず、光仁天皇は関係構築にあたつて行幸しているのである。すでに称徳天皇も天平神護二年（七六六）二月に藤原永手第へ行幸していることをも踏まえれば、天皇と大臣との関係構築の方法として行幸が用いられていたということができよう。そしてそれは、王権の確立の上で不可欠のことだつたと思われる。

したがつて、右のようにあくまで天皇が主体となつて関係を構築してこそ、内臣として藤原魚名を任じることが可能となつたといえる。そしてそれは、たとえ魚名の要請によつた²⁹としても、最終的には王権が主体となつて定められたものであることこそが重要であつたといえよう。

ただし光仁天皇のめざした王権については、一定の限界が存在したことも確かである。長山氏が論じたように、本来王権そのものを強化するのであれば藤原氏の勢力を抑制するべきではあるものの、自らが藤原氏に擁立された存在である以上、光仁天皇の政策にはおのずから限界があつた³⁰。「忠臣」と改称した魚名を、宝龜十年正月朔日に「内大臣」としたことも、そうした光仁天皇の王権の限界を示しているように思われる。したがつて王権の回復には、光仁を擁立した藤原百川・永手・良継の死のみならず、擁立された天皇である光仁天皇自身が讓位・退位するのをまたねばならなかつたのである。

二、桓武期における律令制大臣

（一）藤原魚名の左大臣就任とその罷免

王権像の再構築のために光仁天皇は右大臣とともに内臣を置いて政策を展開したが、いつぼうでその王権像を確実なものとするには、なにより光仁天皇自身の置かれた状況そのものを克服しなければならなかつた。そしてそれは光

仁天皇が譲位し、つづく桓武天皇の即位をまつて初めて可能となったのである。したがってここでも、自らの政策を展開するにあたって桓武天皇が律令制大臣をどのように利用したのかということが、天皇自身の王権像、ひいては天皇の政治理念に結び付いていたといえる。以下、この点をみていくこととする。

天応元年（七八一）四月癸卯（十五）に光仁天皇は桓武天皇に譲位し、これに伴う形で同年六月庚戌（二十三）には、大中臣清麻呂が致仕を申請している。桓武天皇はこれを認めるいつぼう、同月甲寅（二十七）には、内大臣であった藤原魚名を左大臣に任じている。

この後、内大臣の設置は十世紀まで見られなくなるが、まずその理由について整理しておきたい。光仁期において内臣がおかれた理由については、致仕を申請しているとはいえ政策の展開に必要であった右大臣の大中臣清麻呂をおきつつ、政策展開を助ける存在が必要であったためであるときぎに論じた。またあくまで王権の主体性のなかで政策を展開することを求めたものの、結果的には光仁天皇自身の即位事情の関係から藤原氏の補助を必要としたということも、内臣設置の理由に含めることができるであろう。

右のような事情は、桓武期においてはどのように変化したのであろうか。まず前者については、大中臣清麻呂の致仕を認めたことで、内臣をおく必要がなくなったということができる。そして後者については、桓武天皇が光仁天皇から譲位を受けて即位した天皇であるということから、光仁天皇の抱えていたような限界を有さないという違いが生じている。すなわち、桓武天皇は内臣をことさらに設ける必要をもたなかったということができる。こうしたことが、内臣（内大臣）を置かなくなった理由として考えられよう。そして内臣を設けず律令制大臣のみを用いることこそが、本来律令制に即した王権にとつてはあるべき姿だったのではないだろうか。

なお光仁期においてしばしば行われた天皇による大臣との関係構築については、桓武期にはより天皇の主体性が強調されるなかでみられるようになる。これが特に示された出来事として、天応二年（七八二）六月乙丑（十四）にお

ける藤原魚名の大任罷免に注目したい。『続日本紀』では「坐^レ事免^ニ大臣^一」とのみ記されており、その詳細については不明である。中川氏は藤原南家の是公が皇后をめぐって魚名一族を排撃しようとしたこと⁽³¹⁾や、種継による魚名排斥の動き⁽³²⁾を想定している。しかしこの見解には疑問も存しており、新日本古典文学大系『続日本紀』補注は、「桓武の政治姿勢との関連の上で考察すべき事柄と思われる」と説明している⁽³³⁾。本稿もこの説を支持しつつ、この事件が当該期の貴族たちにどのような影響を及ぼしたのかという点に注目したい。すなわち、たとえ左大臣であろうと、天皇によってその地位は容易に与奪されうるものである、ということを示したように思われるのである。桓武天皇は、律令制と天皇制の両立をめざすなかでこのような専制を行使したと考えられ、それは奈良時代の数多くの政争を脱却するための方途であつたといえよう。

(二) 天皇による律令制大臣との関係構築

藤原魚名罷免ののちには、ほぼ断絶なく右大臣が任じられている(前掲【表二】参照)。右大臣が存しない時期が一年前後続く場合もみられるが、こうした場合については、律令の規定の通り、大納言が政務を代行したものと思われる。

以下、魚名以降の律令制大臣について、魚名にみられたように、天皇が大臣のあり方を自律的に定めていったのか、またそうしたなかで大臣はどのような行動をしたのかということについてみていくこととする。

まず藤原田麻呂については、ほとんど国史には見られず、わずかに延暦元年七月庚戌(二十九)に、参議以上の官人とともに天皇へ服喪を解くべきことを奏上するのみである。薨伝についても特に彼の活躍を示してはおらず、大臣に任じられた事情については魚名が罷免されて右大臣の席が空いたことによつて、大納言であつた田麻呂が昇格した

というほかないであろう。

藤原田麻呂が延暦二年三月丙申（十九）に没したのち、同年七月甲午（十九）には大納言の藤原是公が右大臣に昇格している。是公についても、国史の中で記述される部分は、延暦四年六月辛巳（十八）に是公が官人の代表として慶瑞表を奉ったこと、延暦四年九月に藤原種継が暗殺されたときには留守官として同じく長岡宮にいたこと（いずれも『続日本紀』のみである。その人物像については、『続日本紀』延暦八年（七八九）九月戊午（十九）の薨伝に「曉ト習時務」、判断無「滞」と記されており、政務の手腕については十分にあったとみられる。

ただ延暦三年閏九月乙卯（十七）には、天皇が是公第に行幸するということがあった。このとき、宴のちに是公の三男の弟友にたいして従五位下が与えられている。これをただちに天皇による是公との関係性の構築とみることはできないが、すくなくとも行幸をつうじて天皇が主体的に大臣にかかわる様子を認めることはできるだろう。

藤原是公が延暦八年九月戊午（十九）に没すると、大納言の藤原種継が右大臣となった。『類聚国史』三二には、延暦十一年（七九二）二月二十七日に天皇が藤原是公の別業に訪れたことが記されている。是公はこのときすでに没しているため、ここでは継縄との関係から検討する必要がある。そして継縄については、天皇がその別業を訪れたという記事が『類聚国史』などに多くみられる【表三】。この点は史料の残存状況にもよるものであつて注意が必要であるが、前二者と異なり史料に頻繁に表れるのは特徴的であるといえよう。田中氏は、ほかの貴族たちへの対応も含めて、平安遷都に際して天皇が貴族たちに対して配慮したとみている⁽³⁴⁾。これを大臣に援用して考えるならば、それは天皇が主体となつて律令制大臣との関係性を確立しようとしたということにならう。そして律令制大臣のなかに天皇との近さという「位」の性格を改めて収斂させようとしたということになるのである。

彼の手腕については、『日本後紀』延暦十五年（七九六）七月乙巳（十六）条の薨伝に「継縄歴文武之任」、居「端右之重」。時在「曹司」、時就「朝位」、謙恭自守。政迹不聞。雖無「才識」、得「免二世譏」也」とある（本文は集英

表3 桓武天皇と藤原継縄

年	西暦	月	日	記事	典拠
延暦 12	793	2	28	別業に行幸。	『類聚国史』 78
		4	3	継縄奉獻。	『日本紀略』
		8	28	別業に行幸。	『類聚国史』 32
		11	2	別業に行幸。	『類聚国史』 78
		11	10	狩猟に継縄が同行。	『類聚国史』 32
延暦 13	794	1	20	継縄奉獻。	『類聚国史』 78
		4	28	継縄の莊園に行幸。	『類聚国史』 32
延暦 14	795	10	16	別業に行幸。	『日本紀略』

社説注日本史料による）。『日本後紀』全体に共通する辛辣な人物評となっている点には留意すべきものの、引用部分からは光仁期の大臣や藤原是公にみられたような政治手腕が彼にはなかったものと考えられる。このように政治的手腕のないなかでも右大臣をつとめることができた理由としては、さきにみたように、桓武天皇が大臣との関係を構築したことが考えられる。あるいは高橋富雄氏が指摘したように、天皇自身が知太政官事のようにきわめてつよい権限を有して政治を主導した⁽³⁵⁾ことも、継縄が右大臣をつとめるうえでの条件となったと思われる。

藤原継縄が延暦十五年七月に没すると、約二年間、左右大臣が置かれなかった状況となった。このように長期間にわたって律令制大臣が置かれなかったのは、長屋王の変直後の神亀六年(七二九)から天平六年(七三四)まで以来のことであった。このことについては野村忠夫氏が、大納言であった紀古佐美が形式上とはいえ政府首班となったとみて、藤原氏の頽勢と紀氏の進出を見出している⁽³⁶⁾。ただし紀古佐美は継縄が没したことを受けてようやく延暦十五年七月に大納言に昇ったところであつたことから、ただちに右大臣になるということはできなかったと考えられる。

延暦十六年四月に紀古佐美が没したのちには、古佐美とともに大納言に昇つていた神王が右大臣に昇進した。これにより律令制大臣が復活したが、注目すべきは神王という皇親層からの大臣就任となったことである。野村氏が指摘しているように、神王は桓武天皇の従兄弟関係にあたり、大納言の壺志濃王とあわせて血

縁・婚姻関係者を執政に用いるという点で桓武が専制的なあり方を示したものとみることができよう⁽³⁷⁾。この点は当該期の官符においても確認でき、林氏は多数の官符が神王の宣にもとづくこと、そしてそれらがほとんど奉勅宣であることに注目して、当該期の議政官組織が「桓武天皇の忠実な官僚として存在意義をもつものであった」としてい
(37)

このようにみると、桓武期の大臣は天皇自身によつて関係が確立されている人物が多くを占めており、政務に巧みであるというよりも、むしろ天皇に対する忠実さにもとづいて大臣は政治にあたつたということができよう。それは、光仁期における律令制大臣と内臣の並立状態を克服することによつて得られたものであり、奈良時代における政治的混乱からの脱却を意味したといえる。

おわりに

以上、二章にわたつて考察を進めてきたが、その要点は次のようにまとめられる。

まず光仁期には、称徳期にみられた「官」「位」分離という状況を利用しつつ、律令制政務に集中させた存在としての右大臣、そして天皇との近さをもとに政治を行う内臣という二者を並立させることで、王権主体の律令制を構築しようとした。もちろん大臣については「官」「位」の双方が一体的に把握されるべきであつて、それは内臣という存在を律令制大臣に収斂させていくことを要求するのであるが、右大臣の大中臣清麻呂がすでに致仕を申請できるほどの老齢にあつたこと、天皇自身が藤原氏によつて擁立された以上、藤原氏の就く内臣という地位を統御することが困難であつたことから、光仁天皇はこの並立状態を克服することができなかった。

つづく桓武期には、大中臣清麻呂が致仕したこと、そして天皇自身も光仁天皇からの讓位によつて即位した存在で

あることから、光仁期に存在した課題を解決することができた。それゆえに内臣という存在を置く必要はなくなり、かわりに内臣に求めていた「位」を律令制大臣に収斂させていくこととなった。桓武天皇は藤原魚名の罷免や、藤原是公・繼縄第への行幸、あるいは婚姻関係者としての神王の起用などを通じて天皇と大臣との近さを構築した。そして天皇の主導のもと律令制の政務を行う存在として、律令制大臣が位置づけられることとなったのである。

本稿では氏族制・合議制とのかかわりについては捨象し、あくまで律令制大臣という地位に特化して検討を行った。したがって本稿で得られた主張の当否については、あらためて氏族制・合議制の議論のなかにこれを位置付けて論じなければならぬだろう。また桓武天皇の行った公卿統制についてはその後の天皇のもとで変化が生じており、のちには内大臣、摂政・関白といった存在が登場するようになる。こうした視点から、平城・嵯峨天皇以降に続く律令制大臣について検討を進める必要も認められる。このほかにも議論すべき点は多いが、これらは今後の課題とし、今は大方のご叱正を乞いたい。

註

- (1) 山本信吉「内臣考」『摂関政治史論考』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九六一年。二宮正彦「内臣・内大臣考」藤原朝臣魚名を主題として——『続日本紀研究』九一一、一九六二年。
 - (2) 倉本一宏「内大臣沿革考」『摂関政治と王朝貴族』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九一年、一一四頁。
 - (3) 田中正日子「奈良末・平安初期の政治上の問題——中央官人の動向をめぐって——」『日本史研究』一九五九年、九頁。
 - (4) 亀田隆之「藤原魚名左降事件」『奈良時代の政治と制度』吉川弘文館、二〇〇一年、初出一九八九年、一九八—一九九頁。
- 亀田氏は「内臣ひいては内大臣は、天皇にとつて国家的政策を実施する上での協力的存在であるとともに、また議政官の代表者として、場合により対峙する存在にもなる」とし、註において、「こうした角度からもう一度、良継・魚名が任命された内臣——内大臣を見直す必要がある」と指摘している(二〇五頁)。

- (5) 山本前掲註一、四一六頁。
- (6) 土居「宣命における律令制大臣の地位表現」『研究年誌』（早稲田大学高等学院）六四、二〇一九年。
- (7) 倉本氏は、内臣が王権とのつながりから力を持ったとしている（倉本一宏「律令国家の権力中枢」『日本古代国家成立期の政權構造』吉川弘文館、一九九七年、四二三頁。前掲註二、一一四頁）。ただこの点は、本来は律令制大臣が有していた側面ということもできるように思われる。
- (8) 中川收氏は、内臣が大臣と同等の役割を果たすような仕組みを創出したのは、光仁天皇の独創であるとは考え難く、良繼が発想した可能性が高いとみている（中川「光仁朝政治の構造と志向」『奈良朝政治史の研究』高科書店、一九九一年、初出一九八〇年、三九一頁）。ただそうした発創を最終的に認めたのは光仁天皇であり、また律令制大臣が先に記したようにその性格を変化させていたことを踏まえれば、やはり王権が主体となつてこれを定めたとすべきであろう。
- (9) 米田雄介「内臣の系譜——摂関制の成立前史——」『摂関制の成立と展開』吉川弘文館、二〇〇六年、四二頁。なお、十川陽一氏は、内臣の食封や奉勅宣者としての内臣のあり方に注目し、内臣が太政官にとりこまれて令制官に同一化していると指摘している（十川『天皇側近たちの奈良時代』吉川弘文館、二〇一七年、一五六―一五七頁）。
- (10) 土居「律令制大臣の地位的特質」『史学論叢』佐藤信先生退職記念特集号、二〇一八年。
- (11) 倉本前掲註二、一〇一頁。
- (12) 林陸朗「桓武朝廟堂の構成とその特徴」『桓武朝論』雄山閣、一九九四年、初出一九六九年、三五頁。
- (13) 田中前掲註三、一一頁。
- (14) 中川收「光仁朝の政治的動向 上」『政治経済史学』四五、一九六六年、四頁。
- (15) 二宮前掲註一、一〇頁。
- (16) 林陸朗「桓武朝の太政官符をめぐる」『桓武朝論』雄山閣、一九九四年、初出一九八五年、二三二頁。
- (17) 岩本次郎「右大臣大中正清麻呂の第」『日本歴史』三一九、一九七四年、五〇頁。
- (18) 倉本前掲註二、一〇四頁。
- (19) 長山泰孝「古代貴族の終焉」『古代国家と貴族』吉川弘文館、一九九二年、初出一九八一年、一二二頁。
- (20) 山本氏は、内臣は形の上では太政官の官として良繼が置いたものであるとし（前掲註一、四一六頁）、橋本義彦氏は宮

廷の枢機を握る要職である内臣の性格を包含する大臣、すなわち「内臣プラス大臣」であつたとする（橋本義彦「勸修寺流藤原氏の形成とその性格」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九七六年、初出一九六二年、二八五～二八六頁）。さらに二宮氏は内臣を大納言に準じて官制化したものと指摘している（二宮前掲註一、一〇頁）。ただ私見によれば、内臣とは律令制にもとづいた王権を構築するための役職であつたというべきであろう。それゆえ律令制を現実的に運用するという目的からいえば「太政官の官」ととらえることができ、従前の内臣と比べれば大臣の補助を行う点がより大きな部分を占めることから「内臣プラス大臣」ということになり、律令制を施行するための役職であることからいえば内臣は「官制化」した、というように評価できるのである。

(21) 倉本前掲註二、一〇四頁。

(22) 表二—一においても述べたように、『類聚三代格』ではすべて内大臣となつてゐることから、おそらく『類聚三代格』編纂にいたるまでの間に、原格の字句の改変が行われたものとみられる。

(23) 林前掲註一六、二三二頁。

(24) 佐藤信「古代の『大臣外交』」についての一考察」村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社、一九九七年、九五～九八頁。

(25) 田中前掲註三、八頁。二宮前掲註一、一一頁。中川前掲註八、三九八頁。

(26) 山本前掲註一、四一七頁。

(27) 忠臣への改称理由については、山本氏は「藤原氏が代々の天皇に仕えて忠であつたという家格の昂揚」や、「自己の藤原氏内における立場の強化を計つた」ものとして、魚名が主体となつた改称であつたとしている（山本前掲註一、四一八頁）。一方、米田氏は、天皇の信任によつて藤原百川が「内外機務」に関わることとなつた（『続日本紀』宝龜十年七月丙子条藤原百川薨伝）こととの重複を避けるために改称したとする（米田前掲註九、五四頁）。そして山本好信氏は、魚名が良継体制からの脱却を図るために改めたとしている（山本「藤原魚名」『藤原北家・京家官人の考察』岩田書院、二〇一五年、初出二〇一四年、一五一～一五二頁）。ただ王権側が魚名を起用するということを考慮した場合には、やはり光仁天皇が主体となつて、忠実な臣下とさせようとして改名したと考えるべきように思われる。

(28) 岩本氏は、光仁期で邸宅に行幸したことが明らかなのは清麻呂のみであり、それは光仁天皇の信頼や親密感にもとづくものであるとする。岩本前掲註一七。

- (29) 中川前掲註八、三九八頁。
- (30) 長山前掲註一九、一二三頁。
- (31) 中川收「桓武朝政權の成立 下」『日本歴史』二八九、一九七二年、九三〇～九四頁。
- (32) 中川收「左大臣藤原魚名の左降事件」『國學院雜誌』八〇—一一、一九七九年、九四頁。
- (33) 『続日本紀』五（新日本古典文学大系）、岩波書店、一九九八年、五七一頁（亀田隆之氏執筆）。なお亀田前掲注四をも参照。
- (34) 田中前掲註三、一六頁。
- (35) 高橋富雄「平安初期の性格規定について」『日本歴史』二四八、一九六九年、七頁。
- (36) 野村忠夫「桓武朝後半期の一・二の問題」『古代学』一〇—一二・三・四、一九六二年、二三一～二三三頁。
- (37) 野村前掲註三六、二三三頁。
- (38) 林前掲註一六、二三四・二四六頁。